

# 餓鬼

シテ 悪友

ワキ 北国方の僧

時 所 越中立山  
秋 盂蘭盆会

「悟れば近き法の道。く。まよへば遠き闇路哉。

「是は北方に住沙門にて候。我古へ悪友にまじはり。山賊夜盜の身成しが。友とする者うち討れ。

不思議に我世にのこり。貴き知識にまみえ。先悔を悲しみ齧切。能登の惣持寺に十三年取籠り。生死の一大事を観じ候。又秋来りうら盆会の時来れば。越中の立山に登り。悪友の十三廻を弔ひ申さんと。此程茲に来りて候。

「実や無情を観ずれば。夢幻泡影の世成事を忘れ。

一身を立ん其為に。悪業をなしける墓なさよ。

「是に流れの候。水せがきし。亡友を弔はふするにて候。若人欲了知。三世一切仏。応觀法界性。一切唯心造。

「喃々御僧。唯今の破地獄の小施餓鬼を。救はん為には。など大施餓鬼をばなし給はぬ。

「不思議や四方の谷峰に。諸々の地獄の煙立上り。

人住べくも見えざるに。人声するは何者ぞ。

シテ詞

「実御見忘れは断也。是は古へ御身の友成し悪友成  
が。作りし罪の報ひの結果。畜生修羅に落こちの。

立木を求て今は又。餓鬼の苦患を受るなり。

ワキ詞

「扱は左様に有けるか。我悪念を翻し。今善念を求  
るも。かたぐくうかめん為なれば。一切衆生諸共  
に。仏果菩提に至るべし。

シテ詞

「荒有難の結縁や。悪人の友を振捨て。今善人と成

給へば。

ワキ

「其罪障は重く共。

シテ

「法の力による浪の。

ワキ

「うかめん事は安からん。

同

「唯一念の悟りには。く。無量の罪も消ぬべし。

発起せよく。迷ひの雲は厚くとも。鷺の山風吹

落ば。真如の月は澄べしや。く。

ワキ詞

「大施餓鬼にてぐるるいを弔ふべし。抑目連尊者。

悲母の為にうらぼん会の供養有。其結縁不可思議也。猶々冥途に通ずる謂れ。生を替てはしるべし。末世の為に物語候へ。

クリ、同「夫餓鬼供養の事。天台の僧恵心大徳。往生要集に詳かに述作有。殊に正法念経に説。又ゆがろんに。明らか也。

サシ「暫く要集の心によらば。住所二つ有。

同「地下五百由旬有。是を焰魔王界と名付。二つに人

天の間に有。其相甚多し。少分を上ていはゞ。

クセ「身のたけ一尺。或は千ゆぜん也。雪山の如し。大しつ経には。其身長大にして面目なし。手足猶。かなへの足の如く。熱火中にみちて。其身をやきとろかす。是財をむさぼり。人を殺せし報ひ也。

又食吐と名付て。其長半由旬なり。常に嘔吐を求む。是は富て美食し。妻子けんぞくにあたへぬ罪の報ひ也。或は樹の中に有。逼迫せられて身を押

事。とくさの虫の如くなり。是は梵僧の。園林を徒に。きり取し報ひなり。

シテ「論にいわく餓鬼の形地。

同「口は針の穴の如く。腹は大山にひとし。飲食とぼしく。適々少食に向へば。変じて猛煙と成て身をやく。人間の一月は。餓鬼の一日一夜として。五百歳の苦しみ。けんどんしつとのむくひ也。

ロンギ、同「実哀成物語。聞に心も白露の。魂も消る計也。

シテ「斯苦しみを受る身を。抜け給はん一乗の。法の御船に棹さして。彼岸に迎へ給へと。

同「云かとみれば忽ちに。身より火煙を出しつゝ。あつと計に叫ぶ声。大地にひゞきうせにけり。く。

(申入)

ワキ「過去七仏を説法の。く。亡者の為の大施餓鬼。

声立山の草も木も。皆成仏の観ぎんかな。く。

後シテ、一声「荒有難の御法やな。く。

サシ

「我は車の輪の如く。行廻りく。輪廻の浪にちんりんして。うかむ世もなき苦海に沈み。餓鬼畜生の地獄道。生替り死替り。出でもやらざる六つのちまた。離れん事の有難さよ。

ワキ  
「不思議やな。口には離れし輪廻の言葉。姿は聞しき餓鬼の形ち。何れを夢とわかつまし。

シテ  
「今日出そむる輪廻の姿。委敷苦患を顕はして。疑ひをはらし。今日の。ほうしやに。お僧に見せ申

さんと。

同  
「云声の下よりも。く。天地一同に鳴動して。六時不斷の呵責の時ぞと。地に倒れて悲しめば。大地俄にはれつして。暴風吹出。罪人を。中天に吹あぐる。あふげば空よりりんぼうくわりん。車輪の如く打碎く。雪よ霰と見る中に。

シテ  
「れいくと形地出来て。火煙の息をほつとつき。

同  
「滝水をのまんとて。歩みよる分野。よろくたぢ

くと。行ては倒れ立てはふし。からうじて水を  
むすべば。くむよりはやく。ほのほとなり。滝坪  
に飛びたれば。熱湯と涌返り。見るにひまなき苦  
しみなれども。今御僧の弔ひに。即時に悪趣の苦  
患を払つて。涼風百味のをんじきわきみち。成仏  
する社有がたけれ。成仏するぞありがたき。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『古今謡曲解題』丸岡桂著

『宴曲十七帖 謡曲末百番』国書刊行会編